

# ゲートボールの歴史

- 昭和22年 鈴木栄治氏、北海道芽室町でゲートボールを考案。
- 昭和23年 3月 鈴木氏、北海道庁体育課と北海道レクリエーション促進協議会を訪れ、ゲートボールを説明する。  
6月 北海道教育委員会主催でゲートボール講習会を開催（札幌市大通り公園）  
10月 第2回全国レクリエーション大会に、ゲートボール競技が公開され、ゲートボール普及会鈴木氏がゲートボール競技の道代表として参加。（九州・福岡市）
- 昭和24年 9月 第1回北海道体育大会で公開競技を行う。
- 昭和29年 5月 日本ゲートボール協会設立  
戸外のレクリエーション競技として、学校関係、官公庁、一般企業対象に普及活動が行われる。  
10月 日本ゲートボール協会主催で、第1回東京都知事杯日本ゲートボール総合選手権大会を開催（東京・上野）
- 昭和34年 6月 熊本県教育委員会がゲートボールを奨励。以後、全国各地で体育指導委員たちによって地道に普及活動が続けられる。
- 昭和40年～ 文部省の「国民皆スポーツ」の提唱があり、各地にゲートボール団体が新たに誕生。それぞれ全国展開昭和50年を打ち出し、全国への普及に乗り出す。
- 昭和56年11月 芽室町で第1回全町ゲートボール大会開催。（21チーム参加）  
芽室町ゲートボール協会設立。
- 昭和59年11月 芽室町に道内初めての屋内ゲートボール場、老人健康増進センター完成。  
鈴木寿美さんの手紙により、芽室町がゲートボール発祥の地であることが判明する。  
（財）日本ゲートボール連合発足。
- 昭和60年 9月 世界ゲートボール連合設立。  
11月 文部大臣杯第1回全日本ゲートボール選手権大会（東京）
- 昭和61年 4月 第1回全国選抜ゲートボール大会（東京）  
7月 芽室町にゲートボール発祥の地記念碑建立  
8月 第1回世界ゲートボール選手権大会開催。（北海道・札幌）
- 昭和62年 8月 芽室町で第1回発祥の地杯全国ゲートボール大会開催。
- 平成2年 4月 芽室町ゲートボール発祥の地推進委員会発足。
- 平成3年 1月 日本体育会評議委員会で日本ゲートボール連合が正式加盟決定。  
5月 芽室町で「'91発祥の地ブラジル芽室国際親善ゲートボール大会」開催。
- 平成4年 7月 ブラジル・サンパウロで開催される「'92ワールドカップ国際親善ゲートボール大会」に芽室町が招聘され、3チームを派遣。ブラジルのゲートボール発祥の地、スザノ市の記念碑には「ゲートボール発祥の地芽室町チーム来村を記念してこの碑を建る。」と刻まれた。
- 平成4年10月 第1回アジアゲートボール選手権大会（石川県・金沢市）
- 平成5年 6月 芽室町で第42回北海道教職員体育大会全道ゲートボール大会開催。  
9月 芽室町で第9回北海道知事杯ゲートボール大会開催。
- 平成8年 8月 芽室町で第13回全日本世代交流ゲートボール大会開催。  
9月 第10回発祥の地杯全国ゲートボール大会にブラジルから13チーム参加。
- 平成12年 9月 第14回発祥の地杯全国ゲートボール大会にインドネシアから1チーム参加。
- 平成14年 8月 第16回発祥の地杯全国ゲートボール大会にロシアから2チーム参加。
- 平成16年 8月 第18回発祥の地杯全国ゲートボール大会にブラジルから5チーム、ハワイから2チーム参加。
- 平成17年 9月 第19回発祥の地杯全国ゲートボール大会にハワイから4チーム、ロシアから2チーム参加。
- 平成18年 9月 第20回発祥の地杯全国ゲートボール大会を記念し、報知新聞社から優勝旗の寄贈。

# 創始者 鈴木 和伸



## 年表

- 大正7年 3月21日 秋田県和田市に農家の八人兄弟の四男として生まれる。生まれて間もなく両親と共にサハリンに移住する。
- 昭和15年 旧制富原中学を中退し、志願兵として軍隊に入る。
- 昭和18年 旭川第7師団憲兵經理部に勤務。
- 昭和20年 札幌中島公園の豊平館にて終戦を迎える。様々な仕事を経た後、軍隊時代の上司、藤井政治氏に誘われ、芽室町を訪れる。
- 昭和21年 藤井氏と共にパン工場を経営する。
- 昭和22年 ゲートボールを考案する。
- 昭和23年 実用新案特許を出願する。
- 昭和24年 寿美夫人と結婚する。
- 昭和25年 ゲートボール普及のため、栄スポーツ店を始める。
- 昭和28年 ゲートボールを全国に普及させるため、家族と共に上京する。
- 昭和58年 日本ゲートボール推進協議会を設立。(日本ケーブルテレビジョン)
- 昭和58年 4月9日 享年65才にて逝去。

## ゲートボールの誕生

昭和22(1947)年、北海道河西郡芽室町に住む鈴木栄治氏(のちに、和伸と改名。以下この名による)は、戦後の混乱の中で満足な遊び道具がなく、大人の悪い遊びをまねして遊んでいる子供たちの姿を見て、子供たちのために、手軽にできる健全な遊び道具をつくろうと考えました。

汽車の窓から外をながめ、ボンヤリと考えていたその目に、保線区の人たちが、肩に担いだツルハシが映ったとき、札幌憲兵隊で戦後処理の任務にいたとき目にした、クロッカーを思い出しました。「よし、これだ。」創始者の心に閃くものがありました。そのスポーツの名前や細かいルールなどは忘れてしまいましたが、当時の記憶をたどりながら、スティック(当初、バットと名付けた)とボールを作りました。

そして、ホームボールと関門(現在のゴールポールとゲート)があったことも思い出し、1チーム5人ずつで対戦するスポーツを考案し、「ゲートボール」と名付けました。ルールは、近くの広場に子供たちを集めて遊びながら、腹案に少しずつ工夫を加え、十勝平野に馬鈴薯の花が咲き乱れるころ、こうしてゲートボールが誕生しました。



北海道教育委員会主催の講習会(昭和23年6月 札幌大通公園)

北海道教育委員会主催の講習会(昭和23年 札幌大通り公園)



# 芽室発一ゲートボール

## 芽室発一ゲートボール

戦後間もなく昭和21年の暮れ、ゲートボールの創始者である鈴木和伸氏は、不思議とウマがあった藤井政治氏を訪ねて芽室町を訪れます。二人は共同でパン工場を興し、パンは飛ぶように売れました。しかし、パンを売り歩いている時、子供たちが遊ぶ道具もないのを見て、鈴木氏は「子供たちが楽しく遊ぶ道具はないだろうか…」と感じます。そしてツルハシを見てゲートボールを閃いた鈴木氏は、その日から毎日試行錯誤しながら道具を製作しました。初めは、近所の人たちから狂人扱いされた鈴木氏でしたが、藤井政治氏やのちに野球選手として活躍した福家明氏の協力を得て、だんだんと子供たちが集まってくるようになりました。



昭和23年当時のスティックとボール



ゲートボール発祥の地記念碑(芽室町)



ゲートボールに興じる三笠宮殿下



# 世界にはばたく

## 海外への普及

現在（財）日本ゲートボール連合が紹介と用具の提供を行っていますが、ゲートボールの普及状況は各国により様々です。例えば、中国では愛好者が260万人を超えており、現在でも爆発的な普及を続けています。しかし、経済不況が続くペルーでは、国民平均月収が60ドルに対してスティック1本が100ドルもするため、あまり普及していない状況です。



世界ゲートボール連合の設立(1985年)



世界ゲートボール連合加盟国

# 各種大会の開催

## 各種大会の開催

(財)日本ゲートボール連合が発足し、協議規則が統一された後、様々な大会が全国規模で開催されるようになりました。第1回全日本ゲートボール選手権大会(文部大臣杯)が昭和60(1985)年に開かれた後、全国規模の大会が数多く開かれるようになりました。

### 世界ゲートボール選手権大会

1985年9月、世界ゲートボール連合が設立された翌年から、「世界ゲートボール選手権大会」が開かれています。

1986年、札幌市で第1回大会が開催されて以来、毎年秋に横浜市(日本)、サンパウロ市(ブラジル)、名古屋市(日本)、ソウル市(韓国)、鹿児島市(日本)、ホノルル市(アメリカ/ハワイ)と世界各地で大会が解されています。

### 全日本ゲートボール選手権大会

1985年の第1回大会から、全国47都道府県の代表が一同に集って技と力を競い合う、まさに実力日本一を決定する年間最大のチャンピオン大会。テレビや新聞など、マスコミにも大々的に取り上げられ、ゲートボールファンはもちろん日本中から注目されるビッグなイベントです。優勝チームには名誉ある文部科学大臣杯が授与されます。

### 全日本世代交流ゲートボール大会

この大会では、高齢者(60歳以上)、青壮年(中学校卒業以上60歳未満)、子ども(中学生以下)の三世代のプレイヤーがチームを構成し、力を競い合います。世代を超えて、老若男女と一緒にプレーできるのはゲートボールならではの、世代の交流を目的にしている大会だけに、暖かなコミュニケーションが見られます。平成8年の第13回大会は芽室町で開催されました。

### 発祥の地杯全国ゲートボール大会

この大会は、「ゲートボール発祥の地芽室町」の名を全国に広めるため、毎年芽室町で開催されています。全国各地から世代・地域を超えて、集う人々とふれあう心の温まる大会です。最近では、海外からの参加チームもあり、バラエティ豊かな大会となっています。あなたのチームもこの青空の下でさわやかな汗を流してみませんか。